

まほろば



目的：技能実習生をはじめとする外国人労働者と私たちがあたりまえに馴染んで生活できる社会をつくる。こういったアプローチを通し、誰にとっても生きやすい場所をつくることにつなげていく。



パン屋で働く技能実習生

8月18日、北白川にあるパン屋で働くジェイシーさんにお話を伺った。ジェイシーさんは、特定技能2年目、日本に滞在し始めて7年になる。同郷のコミュニティもあり、充実した日々を過ごしている様子であった。

一方で、職場・住居環境や仕事内容、給料面に加え、監理団体との関係などによる苦難も多いと語る。職場は常に人材不足で、毎日2人分の仕事を担う。会社が用意したシェアハウスも1人1部屋ずつだが、綺麗とは言えないものであった。

今回、実際に京都で働く技能実習生の労働環境と生活状況の一例を知る良い機会となった。

食の多様性を目指して

9月22日、立命館アジア太平洋大学（APU）を訪問した。APU食堂の松田さんにお話を伺い、生協におけるハラルフードの提供や日本で生活する外国人の食の問題について考えた。

またAPUショップと生協食堂を利用した。APUショップでは海外の食品も販売されており、ハラル認証の冷凍食品やインスタント食品、調味料もあった。生協食堂ではこの日は入学式であったため、提供されるメニューはすべてハラル対応となっていた。大豆ミートの提供もあり、フードバリアフリー

が推進されていると感じた。

外国人学生による多国籍屋台もあり、多様な国の料理を食べる機会が提供されていた。



信頼関係を築くために試行錯誤

9月22日、大分県にある北崎農園取材した。現在、特定技能7名、技能実習生9名の外国人材を受け入れている。作業現場を見学したが、彼らの仕事への集中とスピードには驚いた。

今ではこのような仕事の雰囲気が出来上がっているものの、過去には、失踪をしたり言い合いになったりした実習生がいたという。北崎さんは、そのような経験を踏まえ、仕事では一人一人のモチベーションアップにつながるように成果を可視化、日常生活では可能な限りコミュニケーションをはかるように心掛けるようになったと振り返る。

取材中には新設した寮も見学し、休憩中の彼らに話を伺った。寮では、フィリピンやベトナム、インドネシアの3か国の女性たちが共同生活をしている。仲の良さは抜群で、元気で明るい雰囲気に一気に気持ちが和んだ。1人1部屋、冷蔵庫も1つずつ。

雇用者の努力と、実習生らの勤勉さがうかがえる現場であった。



編集後記

Q1,Q2を通して、実習生らを取り巻くリアルな環境を取材してきた。APUの取材では、今後の活動に向けた相談をさせていただくこともでき、非常に有意義な時間となった。Q3では、これまでに踏まえ、実習生らに寄りそった実践活動を見つけていきたい。